

明治学院バッハ・アカデミー会報 (第7号)

巻頭言

芸術監督 樋口隆一

2019年も師走に入りました。この1年の活動についてご報告申し上げます。

5月には、N&F制作によるわたしたちのCD「J.S.バッハ カンタータ傑作集」(MF22316)が、ユニバーサル・ミュージック IMSより発売となりました。これは2018年6月2日(土)に紀尾井ホールで行った演奏会のライブ録音です。『レコード芸術』7月号はもとより、大阪いずみホールの音楽情報誌『jupiter』8月号、さらには『日本経済新聞』8月20日夕刊の「ディスクレビュー」でも紹介されました。

このCDに収められたカンタータBWV106, 131, 100は、私がドイツ留学中に校訂した『新バッハ全集』/34に収められた7曲のカンタータのうちの3曲なので、こうして各方面に認めていただけたことはとてもありがたいことです。



カンタータ傑作集 CD



第2回 バッハ・カンタータ演奏会 (撮影: LASP Inc.)

8月31日(土)、紀尾井ホールで「バッハ・カンタータ演奏会」の第2回が行われました。私が校訂した上述の7曲の残りの4曲にあたるBWV157, 117, 192, 97を演奏することができました。前年の3曲のCD発売が重なったこともあってか、ほぼ満席に近い大勢の聴衆に恵まれました。オランダ在住のヴァイオリン奏者赤津眞言さんが久しぶりにコンサートマスターを務めて下さり、躍動感に満ちた演奏となりました。

これらのカンタータは、BWV157が1727年、他の3曲は1730年代に作曲上演されたものなので、いわばバッハのカンタータ創作の総決算とも言えます。したがって独唱も合唱も精緻を極め、演奏は容易ではありません。しかしソリストの光野孝子さん、庄司祐美さん、大島博さん、土田悠平さんの名唱はもとより、合唱団も周到な準備を重ねた結果、満足のいく演奏会となりました。現在そのライブ録音の編集中心ですが、それを聴くと特に合唱団の進歩が著しく、嬉しいかぎりです。

11月30日(土)には、港区と明治学院大学の共催による「チャレンジコミュニティ大学」の一環としての演奏会「バッハから現代へ」が、大学内のアートホールで行われました。プログラムは、バッハの傑作のひとつであるモテット《イエス、わが喜び》に始まり、メンデルスゾーン、ブラームス、ブルックナー、レーガールの宗教曲が続き、最後にシェーンベルクの《3つのドイツ民謡》Op.47で終わるといものでした。栗島和子さんのオルガン伴奏で、バッハから現代への宗教曲を辿るという趣向です。合唱団はほぼ2時間にわたり歌い詰めでしたが、最後のシェーンベルクも良い感じで歌うことができ、大きな満足を味わうことができました。聴衆も大喜びで、なんとスタンディングオベーションで讃えて下さる方々までおられました。



2019年11月30日 チャレンジコミュニティ演奏会 (撮影:事務局)

12月23日(月)には恒例の「明治学院クリスマス音楽礼拝」が予定されています。ヘンデルの「ハレルヤ」など、チャペルー杯の参列者の前で歌うのが楽しみです。

来年度は、明治学院バッハ・アカデミー創立20周年にあたり、2021年3月27日(土)には、バッハの大作《ヨハネ受難曲》第4稿 BWV245を紀尾井ホールで上演する予定です。



2006年6月4日 ライプツィヒ ニコライ教会

また2022年6月には、ライプツィヒ・バッハフェストへの招待出演も決まっています。この音楽祭にはすでに2006年に参加し、聖ニコライ教会での聖霊降臨祭音楽礼拝で歌わせていただき、大きな感動を味わうことができました。2022年にはできたら聖トマス教会で歌えればよいなど思っているしだいです。

2019年には、かつて合唱団の一員だったふたりの教会音楽家によるドイツでの大成功のニュースがもたらされました。小山田薫さんは、明治学院大学芸術学科卒業後、ワイマール、ハンブルク、ライプツィヒの音楽大学で教会音楽を学んでいましたが、2019年8月からライプツィヒ郊外ヴルツェンの女性カントールに就任しました。また安積道也さんは心理学科卒業後、シュトゥットガルトとフライブルクの音楽大学で教会音楽を学び、帰国後、明治学院バッハ・アカデミー合唱団副指揮者を経て、福岡の西南学院音楽主事として「西南学院オラトリオ・アカデミー」を設立して大成功を収めました。2020年4月からはハイデルベルク教会音楽大学合唱指揮科教授への就任が決まっています。おふたりの努力はいうまでもないことですが、明治学院バッハ・アカデミーの存在が、次世代の優秀な音楽家のドイツでの活躍に多少とも貢献できたかと思えば、これ以上の喜びはありません。



バッハ・アカデミーから続く道

Soprano OG 小山田薫

ドイツからの一時帰国の度に練習にお邪魔している小山田薫(おやまだかおる)です。私がバッハ・アカデミーに入ったのは2002年。あの頃からだいぶメンバーも入れ替わり、お久しぶり、というよりは初めまして、の方が多くなりました。山あり谷ありの合唱団の運営を様々なひらめきとアイデア、そしてたゆまぬ努力で続けられている樋口先生と初めてお会いしてから17年。あの頃の私からは全く想像もつかないことですが、私は現在ライプツィヒから30キロほど東にあるヴルツェンという街でカントールとして働いています。このカントールという仕事にたどり着くまで、本当に様々な出会いと経験がありましたが、中でもバッハ・アカデミーとの出会いは一際大きなものでした。



2019年クリスマス ヴルツェン市教会 礼拝奏楽

そもそも私の大学を選ぶ基準は音楽でした。音楽を専門的にやりたいなら音大へ、とも思いましたが、大学受験直前に起きた9.11の衝撃は大きく、音楽だけを学ぶことに疑問を感じ、音楽実践のチャンスがたくさんある総合大学への進学に切り替えました。中学高校とオーケストラ部にいた私にとって、充実した勉学の他にオーケストラサークルがあることは必須、その他合唱もできパイプオルガン講座もある明治学院大学は私の好奇心を満たす要素を揃えている唯一の場所でした。

入学後すぐにバッハ・アカデミーに入れていただきましたが、実は外国語作品の合唱経験はそれほどなく、バッハに至っては取り組むことすら初めてでした。そんな私の人生初のバッハ作品はまさかのロ短調ミサ(笑)。楽譜は読めても喉のコントロールが効かなかったあの頃、練習に行ってももう何をやっているのだからさっぱり見えてこず凹みに凹んでいたのですが、本番1週間前になって突如頭の中がスッキリハッキリするという不思議な体験をし無事に歌うことができました。あれから16年経った2019年の秋にアイゼナハの聖ゲオルゲン教会でロ短調ミサを歌う機会があったのですが、楽譜のページをめくるたびにバッハ・アカデミーでの自分の奮闘ぶりが蘇り、非常に感慨深かったです。

大学卒業後、オーケストラ指揮の勉強を目指して迷走していた私にワイマールへの交換留学を持ちかけてくださったのも樋口先生でした。ドイツには、大学2年の夏にハンブルク大学の語学研修、そして2006年のライプツィヒ演奏旅行で行ったことがありますが、留学となるとまた別次元。「留学生活＝悠々自適な羨ましい生活」とイメージされることが非常に多いですが、現実には言葉は不自由、食も気候も文化も異なる場所でのサバイバルです。日本では当たり前であった習慣や物の重要性を思い知らされました。毎日新鮮な魚を食べられる喜び、営業時間を計算せずともいつでも買物できる便利さ、そして冬晴れの穏やかな日差し。日本では当たり前のこれらの恵みはドイツで生活しなかったら一生気づけなかったと思います。ワイマールでの生活は、ドイツを知るとともに己を知るとても大切な日々でした。



ワイマール フランツ・リスト音楽大学

2010年秋、もう一度ドイツへ行きたいと思い、ハンブルク音楽院の指揮科に入学しました。冬にはクリスマスオラトリオをハンブルク聖ミハエリス教会で聞き、自分もドイツでバッハを歌いたいと思い、聖カタリーネン教会聖歌隊に入隊、別の声楽アンサンブルにも入りました。このアンサンブルのメンバーの大半が教会音楽家で、将来の話などをしていくうちに「教会音楽科に行ったらどうか？」と勧められ、初めてカントールの職業訓練として教会音楽学科があることを知りました。初めは短期留学のつもりではあったのですが、その頃に東日本大震災が発生。「人生限られているならやりたい事を今やろう」と決心して受験準備を始め、オルガンも再開しました。



ライプツィヒフェリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ音楽演劇大学

ドイツの受験には「合格と入学許可は別物」という決まりがあり、合格しても席数が足りなければ入学できない仕組みになっています。この厄介な仕組みに阻まれもしましたが、無事にライプツィヒ音楽演劇大学の教会音楽科に入学、4年間必死に勉強しました。ライプツィヒでの最初の2年間のオルガンの師匠クリストフ・シェーナーは、ハンブルクで聞いたクリスマスオラトリオを指揮していた教会音楽監督でした。

偶然にもライプツィヒ音大でオルガン講師の欠員が出て急遽クラスを持つことになったそうですが、この偶然は私にとって非常にありがたいものでした。私は

入学当時すでに30歳、同学年の学生の干支はひとまわり下。小さい頃から教会音楽に携わって生きてきた彼らとは経験値も違うし、吸収力も違う。しかし師匠は常に言ってくれました。「君が今まで経験してきた音楽は全てこの先につながる。今の君に足りないのはオルガンのテクニックだけでそんなものはすぐに身に付く。今できないことを数えるな。周りとは絶対に比べるな。」この言葉に何度となく救われました。

ハンブルク最大規模の教会の音楽監督でありながら、さらに2週に1度ライプツィヒまでレッスンしに来る彼の情熱とバイタリティは本当に信じがたい物でしたが、教会オルガニストとしての基礎を彼の元で築けたことは非常に幸せなことだったと思います。

無事に大学を卒業した2017年夏から1年半、ライプツィヒ近郊のタウハ教区で産休育休の代理カントールとして働きました。児童合唱によるミュージカルやバッハのクリスマスオラトリオの上演など、イベントに非常に恵まれた環境でした。特にクリスマスオラトリオのオーケストラはMDR(中部ドイツ放送交響楽団)のコンサートマスターがタウハの教会役員ということもあり、彼の同僚であるMDRのメンバーが演奏してくれるという豪華なもので、満員御礼の教会は非常に温かな雰囲気になっていました。前回(会報第6号)の大谷雅子さんの記事にもありましたが、私が明学バッハ・アカデミーに入った当初からいらっしゃった大谷ご夫妻が、2018年遙々タウハまでクリスマスオラトリオを歌いにきてくださったのは本当に嬉しい事でした。



タウハ 聖モリッツ教会でのクリスマス・オラトリオ演奏会(現地新聞)



2019年12月21日 ヴルツェン大聖堂でのコンサート

充実した代理カントールの任期満了後、就職活動をした結果、2019年8月にヴルツェン市のカントールに就任しました。ヴルツェンには市教会の他に大聖堂があり、私は両方の演奏会の企画運営、そして大聖堂聖歌隊、金管アンサンブル、児童合唱、青少年聖歌隊、弦楽オーケストラなど計9つのグループを指導しています。仕事もプロでも事件も毎日ひっきりなしにやってくる、常に千本ノック状態。息つく暇はありません。しかし、毎日の音楽的な指導はもちろんですが、演奏会の企画運営から裏方業務、経理、楽譜の管理など、これまでの数々のアルバイトや仕事の経験が面白いほどに役に立っています。普通に大学を卒業してすぐに就職していたら経験しなかったであろうことの数々が、今ここに全て直結しています。そしてこれらは、ライブツィヒの大学生活で学べなかったことばかり。やりたいことに手を広げるばかりで目的地が見えないまま四方八方に広がった私の経験が、一つの大きな束にまとまったようです。

どんなに曲がりくねった、無意味に見える遠回りな道でも、それらの全ての瞬間が私の人生には絶対に必要だった瞬間だと、今は確信しています。これまでの人生のすべて

の出会いに感謝し、これからも邁進していきたいと思えます。



副指揮者 OB 安積道也

明治学院文学部心理学科卒業生の安積道也(あづみみちや)と申します。中高社会科の教員を目指して明治学院の門をたたいてから、はや四半世紀余りたちました。紆余曲折を経て、来年2020年4月より、ドイツのハイデルベルク教会音楽大学の合唱指揮科教授として赴任することとなりました。それを機に、ここに寄稿の機会をいただけたことを感謝申し上げます。この場をお借りして、ここに至るまで大変お世話になった樋口隆一先生、そして明治学院バツハ・アカデミー合唱団との思い出を書き記してみたいと思えます。

樋口先生との出会い

就職活動を控えた大学3年生の時、一度は「趣味」として位置づけたはずの音楽の勉強への欲求が深まり、私は悶々とする日々を過ごしていました。それまで音楽といえばピアノの楽曲しか知らなかったのですが、合唱で出会った教会音楽に心を動かされ、これならば「仕事」にしても自分の音楽の心が燃え尽きることはないと思えたのも、このころでした。



明治学院チャペル

しかし、音楽といっても幅広く、果たして自分はいったい何の楽器を勉強したいのだろうか
と自問しました。ピアノを始めるには遅すぎる。パイプ・オルガンはどうだろう。しかし歌や合唱も続
けたい。指揮も振ってみたい。でも日本の音大に入るお金はない…いろいろ調べると、ドイツには、私の
してみたいこと全てが主専攻で勉強できる学科がありました。しかも国立に入れば(当時は)学費がかから
ない。これしかない、ドイツへいこう！

若気の至りとはいえ、無謀極まりないアイデアをもって、とりあえずドイツ系の教員にアクセスしようと教
員録をめくってみると、「バッハ」という言葉に彩られたプロフィールを持つ教授を発見しました。アポもな
く、昼休みにいきなり彼の研究室に押し掛け、お仕事中的その方に「先生、僕ドイツに行きたいんです。
どうしたらいいでしょうか？」と理由も話さず話しかけた、それが樋口先生との出会いでした。

樋口先生は、半ばあきれ顔で、それでもひとしきり私の話を聞いてくださり、最後に一言「うん、安積君。
分かった。でもね、とりあえずここを卒業しなさい。」とおっしゃいました。この言葉の重みが分かったのは、
それから6年もたつてからの事でした。ドイツでは、大学入学は比較的簡単ですが、卒業資格を取るこ
とは非常に難しく、一つ卒業資格を持っていることは大きなアドヴァンテージになるのです。留学中に何
かのはずみで私が心理学科卒業者であることが知れると、学友と教員の態度が一変したことをよく覚えて
います。

それから卒論もそつちのけで準備を始め、ドイツ語の勉強と音大入試準備、渡航費のためのバイトを
かけ持つ数年間を過ごします。当時バブル崩壊後、就職難の波が押し寄せようとしている時期でもありま
した。なかなか周囲の理解は得られませんでした。当時の私にとって、ここで音楽の勉強に向けて全
力を尽くしたうえで社会的安定を失うことは、就活して後悔を抱えながら悶々と一生を終えることより、は
るかに「生きる価値のある人生」に思えたのです。数年後、いよいよ受験の時がやってきました。シュトゥ
ットガルトの音楽大学で、オルガン演奏、即興の基礎、聴音、ソルフェージュ、ピアノ、声楽、そして教員と
の面接をこなし、幸運にも入学許可がおりました。卒業後にオルガンの師匠に当時の話を聞きました。
「よくまあ、僕程度の腕でとってくれましたね」と尋ねると、彼は、「僕らは、その受験生が自分たちのところ
で、どのように育っていくのかを見るのだ。上手ければ、大学にくる必要がないじゃないか」と心中を明か
してくれました。日本式の入試思考に慣れていた私にはショックでした。

学部の勉強は熾烈を極めました。ドイツ語の壁もさながら、レッス
ンの多さにもびっくりでした。一番大変だった時期、私は科目の違う
実技の個人レッスンが一週間で9つもあり、毎日が自転車操業だ
ったことを覚えています。中でも合唱指揮は言葉の壁に阻まれ、不登
校の症状が体に出るほどでしたが、不思議と逃げ出す気にはなりま
せませんでした。なぜかという、合唱指揮という分野が、数ある専門の
中でも、自分にとって一番大切なものと思われたからです。今振り返
ると、その時の直感は、間違っただけではなかったようです。

ある時、オルガン科にある日本人留学生が入ってきました。その
人はDAAD (Deutsche Akademische Austauschdienst:ドイツ学術
交流会)の奨学金を取ってドイツに留学してきているとのこと。話のは
ずみでDAAD 役員としての樋口先生のお名前が出てきたのです。
そこでふと、あの研究室を訪ねた日を思い出し、樋口先生に久方ぶ



ライプツィヒ独仏合唱団リハーサル(2006年頃)

りにメールを出しました。こんな不敬な学生の対応にも拘わらず、先生は私のことを思い出して下さいました。それ以来、人生の節目には先生に報告し、また、帰国時に挨拶に伺うようになりました。

最後の勉強



2007年2月 フライブルク独仏合唱団会 St.ガルス教会
定期演奏会リハーサル ハルモニーミサ (J.ハイドン)
合唱指揮者として

大学院進学に際して音大の籍をフライブルク国立音楽大学に移したのですが、そこでとった教会音楽科A課程の資格は国家資格で、すべての実技科目が演奏会形式でおこなわれます。これを持っていると、ライブツィヒのトーマス教会カントールにも応募できます。私はその資格を取って帰国することを心に決めていたのですが、その最終学期の時、ついていた合唱指揮科教授の定年退職に伴った後任教員選出において、年齢と実績がかわれて学生代表となりました。音大教授8人の選考委員会に加わり、最後に自ら一票投ずる大役でした。そこで最後の師となるM.シュルト・イェンセンに出会います。公開で行われる教授試験(合唱指導や、模擬授業など)で私は彼から衝撃を受けまし

た。これまで合唱指揮に関して持っていた自負が一瞬で砕け散り、彼のところで勉強せずに帰国したら、一生後悔すると直感したのです。そこで、それまで舞い込んできていた国内外の就職話を全てキャンセルしたうえで、大学院を再受験。教会音楽科終了後、自ら一票投じた教授につくために合唱指揮科に再入学しました。32歳の時でした。

私はドイツに10年間留学していましたが、最後の2年間はそれまでのものが結実した時期でした。合唱指揮に関するまったく新しい観点と技術を体得し、地元の合唱団とオーケストラとともにオラトリオ作品を多数上演する一方、教会音楽家として一つの教会で責任を持って切り盛りした時期でした。そして2008年、大学院修了をもって、かねてから予定していた通り帰国しました。この時も、ドイツの友人や先生から、「わざわざ合唱後進国に何をしに行く？」と言わんばかりの逆風をはねのけての帰国でした。

帰国後

帰国一番、私は母校明学の樋口先生を訪ねました。おいしいお寿司をごちそうになりながら、それまでの経過を報告し、これからの人生設計をお話したことを覚えています。するとその場で、「じゃあ、安積君。僕の合唱団を手伝ってよ。日本では、どこかに張り付いていた方が便利だし、多少の生活のたしにもなるでしょう。じゃあ次の月曜日ね。」とお誘いいただき、明治学院バッハ・アカデミーの副指揮者を仰せつかった次第です。バッハ・アカデミーでは毎週月曜日、先生がいらっしゃる一時間前の前練習、発声、練習時の伴奏を主にし、演奏会では通奏低音奏者として日本演奏界



2009年3月14日 神代演奏会 (通奏低音奏者として)

で活躍する方とご一緒する機会を多くいただきました。また団員の皆様との心温まる交流は帰国当初、逆カルチャーショックに落ちていていた私には、とりわけありがたいものでした。

そんな生活が始まって二か月もたたないうちに、樋口先生から連絡を受けました。「安積君。西南学院ってところが、ポジションを公募しているよ。君にぴったりだからうけてみたらどう?」。聞いたこともない学校名でした。西南というからには小田原あたりだろうか、と思いつつ、やっとながったインターネットで検索してみると、はるか西南、九州でした。私の人生設計は東京で完結するはずでしたし、本州でもないところ(失礼)で何ができるのかと最初は頑強にお断り申し上げましたが、その後いろいろな働きかけを受け、応募を決意しました。樋口先生には今読みかえしても顔が赤くなるほどの素晴らしい推薦状をいただき応募をしたところ、現職、西南学院音楽主事の職を得ることとなったのです。



2012年4月21日 西南学院チャペルでのバッハ・アカデミーのコンサート(リハーサル) オルガン奏者として参加

結局、帰国から一年たたないうちに九州に移り住み、現在に至っています。バッハ・アカデミーとは副指揮者としては短いお付き合いでしたが、西南学院在任中に合唱団をお呼びしたり、逆に先生から呼んでいただいたり、またその繋がりから、別の合唱団に発展していったケースもあり、どれも思い出に残るものばかりです。

再就活

西南学院では、講義と礼拝奏楽並びにオルガンを中心に音楽プロデュースを主務としていました。ある時学院上層部から、創立100周年にあたる2016年に向けて発信力のある何かをやるよう打診がありました。いろいろアイデアはあったものの、煮え切らない思いを持ったまま上京の折に樋口先生に相談申し上げると、「じゃあ、僕がバッハ・アカデミーをここでやっているように、きみもそれを福岡でやればいい」と背中を押していただきました。そこで、バッハ・アカデミーの名前をいただき、「西南学院オラトリオ・アカデミー」を発足させました。190人ほどの合唱人が集まり、毎年大規模なオラトリオを大学チャペルで行い、2016年には念願のJ.S.バッハの『マタイ受難曲』を上演しました。その後メンデルスゾーンのエリヤやバッハの口短調ミサ曲など、大曲をする機会に恵まれましたが、私の心には、再びドイツに戻りたい気持ちが高まり始めたのです。自分がドイツから持ち帰った合唱指揮に関する技術と音楽を、それを指揮者として求める若い魂に伝えたいと思ったからです。

そこで、ひそかに人生三度目の就職活動を始めました。ドイツの友人らが協力をしてくれて、ドイツ語圏の音大で合唱指揮科教授職の公募があるたびに連絡をくれ、わたしはそれに片端から応募しました。日本ではその話はほとんど口外しませんでした。樋口先生にはいっぺんにその決心を伝えました。すると、これまた素晴らしい推薦状をドイツ語でしたためて下さり、私はそれを毎回応募書に添えて提出しました。足掛け5年、15校近くに応募し、実際に教授試験に呼ばれたのが3回。そのうち2位が2回。最後にハイデルベルク教会音楽大学でやっとポジションを得ることができました。そして、来年4月から、家族3人で新たな人生をドイツにてスタートさせます。

この様に、樋口先生は私の人生の節目で現れ、私の道をさし示し、背中を押し、具体的なアドバイスとともに、助力して下さった尊敬すべき大恩人であります。そしてバッハ・アカデミーは、私が一番つらかった帰国時に、私に居場所と存在意義を与えてくれた合唱団でした。

4月からは、将来のドイツの教会音楽と世界の合唱界を背負っていく学生たちに、合唱・オーケストラの指揮法と指導法を教え、また音大合唱団を率いながら自らの演奏を通して合唱音楽の素晴らしさを示していきます。



2006年12月25日 ギュンタースタール聖母マリア教会カントルとしてクリスマス第一主日に真夜中のミサ (M.-A.シャルパンティエ) を演奏

私はドイツで多大なものをいただいて帰国しました。今度は、樋口先生と皆様方、そしてこれまで日本で共演した方々からいただいた多くのものをもって、ドイツに行つてまいります。いつか必ず帰国公演を果たしますので、心に覚えていてください。

また何かの機会に皆様と共演できることを夢見ながら、全てに感謝をもって。



これからの演奏会のお知らせ

バッハ・アカデミーの今後の活動予定です。詳細が決まる都度ホームページや facebook にてご案内してまいります。皆様ぜひお誘い合わせの上お越しく下さい。

「ヨハネ受難曲」演奏会

日時： 2021年3月27日(土)

場所： 紀尾井ホール

指揮： 樋口隆一

曲目： J.S. バッハ ヨハネ受難曲第4稿 BWV245

バッハ・アカデミー ホームページ: <http://bachakademie.web.fc2.com/>

facebook ページ: <https://www.facebook.com/明治学院バッハアカデミー合唱団-973803896015459/>

明治学院バッハ・アカデミー維持会報 第7号 2019年12月30日発行